

カリキュラム

恩師の生涯最後の授業は、週に一回先生の自宅で行われた。書斎の窓際で、小さなハイビスカスがピンクの花を落としていた。毎週火曜日、朝食後に始まる。テーマは「人生の意味」。経験をもとに語られる講義だった。

単位はもらえないが、毎週口頭試問があった。先生の質問に答えなければならないし、こちらも質問を求められる。それにとどき肉体労働も必要。先生の頭を持ち上げて、枕の楽な位置に落ち着かせてあげるとか、眼鏡をきちんとかけてあげるとか。さよならのキスをすれば評点が上がった。

参考図書はいらないが、題目はさまざまで、愛、仕事、社会、家族、老い、許し、そして最後は死にまで及んでいた。最終講義は短くて、ほんのふたこと、みことで終わってしまった。

葬式が卒業式の代わり。

最終試験はなかったが、勉強したことを長い論文にして提出しなければならなかった。その論文がこれだ。

老教授の最後の授業に出た学生はたったのひとり。

それはほくだった。



一九七九年の晩春、じつとりと暑い土曜の午後。何百人もの学生が、キャンパスの芝生に並んだ木の折りたたみ椅子にずらっと列をなして座っている。全員青いナイロンのローブを羽織っている。長いスピーチにじりじりしてきた頃、やつと式が終わって、一斉に帽子を空に放り上げる。これでめでたくマサチューセッツ州ウォルサムのブランドイス大学専門課程卒業。多くの学生にとっては子ども時代の終幕だった。

式のあと、大好きなモリー・シュワルツ教授をさがし出して両親に紹介する。小柄でちょこちょこ歩く先生は、強い風が吹けばたちまち雲の上まで持っていかれそう。卒業式用ローブをまとったその姿は、さながら聖書に出てくる預言者とクリスマスの妖精の子といったおもむきだ。青緑の目がきらきら輝き、薄くなりかけの銀髪が額に垂れている。大きな耳、三角の鼻、ふさふさしたグレーの眉。歯は曲がっていて、特に下の歯は、誰かにパンチをくらったみたい後ろに引っこんでいるが、笑うと、世界始まって以来最初のジョークを聞いたような表情になる。

先生は両親に、ぼくが先生の授業に全部出ていた話をする。「すばらしい息子さんですね」照れくさくなって足もとに目をやるぼく。別れ際にプレゼントを手渡す。イニシャルを入れた赤

革のブリーフケースで、前の日に買っておいたものだ。先生のことを忘れなくなかった。ぼくのこと先生に忘れてほしくなかったのかもしれない。

「ミッチ、こんなにしてくれて……」ブリーフケースをほればれと見つめながらそう言ったあと、先生はぼくを抱きしめる。背中に感じるその細い腕。

ぼくのほうが背が高いから、こっちが年上のようにできまりが悪い。まるでぼくが親で先生が子どもだ。

「ときどき連絡してくれるね」

「もちろんですとも」間髪を入れず答える。

離れた先生の目に涙が光っていた。

講義概要

死の宣告は一九九四年の夏にやってきた。かえりみてモリーは、それよりもずっと前に何かよからぬことが起ころうとしているのがわかってはいた。ダンスをやめた日だ。

この老教授は、ダンスなしでは夜も日も明けなかった。音楽は問わない。ロックンロールでも、ビッグバンドでも、ブルースでも、何でもござれ。目をつぶり、しあわせそのものの笑みを浮かべ、自分のリズムに合わせて体を動かし始める。必ずしも美しいとはいえない。しかし、そんなときはもうパトナーのことは眼中にない。モリーはひとりで踊っていた。

いつも水曜の夜にはハーヴァード・スクエアの教会に出かけた。お目当ては「ダンス・フリー」。ライトがチカチカ、スピーカーがボンボン鳴っている。ほとんどが学生のその人ごみの中へ、モリーは、白のTシャツ、黒のスウェットパンツ、首にタオルといういでたちで現れ、何でもかまわない、かかっている音楽に合わせて踊るのだ。ジミ・ヘンドリックスのロックにはジルバだった。体をねじりくねらせ、アンフェタミン(中樞神経刺激剤)をのんだ指揮者よろしく腕を振り回し、やがて汗が滴り落ちる。誰もこれがすぐれた社会学の博士で、何年も大学の教授を務め、りっぱな本を何冊か書いているとは知りもしない。おかしなじいさんだ、ぐらいにしか思っていない

い。

いつだったか、先生はタンゴのテープを持ちこんで、かけさせたことがある。そのときはホルをひとり占めにして、前後にサツサツと体を動かす踊りっぷりが、まるで恋の情熱ほとぼしる男のおもむき。終わるとフロアじゅうの喝采を浴びたものだ。その晴れの瞬間が永遠につづいてもよかったのだが……。

やがて、そのダンスができなくなった。

六十を超えてから喘息ぜんそくになった。呼吸が苦しい。ある日、チャールズ・リヴァーのほつりを散歩しているときに、突然冷たい風が吹きつけて息ができなくなり、病院にかつきこまれてアドレナリンを打たれた。

二、三年後には歩行障害が起きた。友人の誕生パーティーでわけもなく足がもつれる。あるときは劇場の階段を転げ落ち、周囲の人をあわてさせた。

「酸素吸入だ！」誰かが叫んでいた。

この頃はもう七十代。みな陰で「お年だから」と言いながら、立つときには手を貸していたが、モリーは自分の体のことは誰よりもわかっていて、何か具合の悪いところがあるという意識があった。ただの「お年」なんかじゃない。しょっちゅうくたびれる。よく眠れない。死ぬ夢も見る。

医者にかかることにした。とっかえひっかえ。血液検査に尿検査。下から内視鏡を突っこんで腸も調べる。何も見つからない。とうとうひとりの医者が、筋肉の生検をしましうと、ふくら

はぎから切片を取った。検査室からもどってきた報告は、神経に問題があるらしいとのこと、またまた検査の連続。そのうちの一つは、特別な椅子に座って、ピッピッと電気を流される——言ってみれば死刑用電気椅子のたぐい——それで神経の反応を調べるのだった。

「もう少しチェックする必要がありますね」と、結果を見たドクターたちは言う。

「どうして？」とモリー。「いったい何なんですか？」

「まだはつきりしません。どうもあなたのテンボがのろいんです」

テンボがのろいって、どういうこと？

一九九四年八月のむしむしする暑い日だった。とうとうモリーと妻のシャーロットは神経科の診察室に向いて担当の医師の前に座り、ご託宣を聞かされた。筋萎縮性側索硬化症（ALS）、別名ルー・ゲーリッグ病。容赦ない残酷な神経疾患だ。

今のところ治療法はありません。

「どうしてそんなものになったんでしょう？」

誰にもわかりませんね。

「もうだめって言うこと？」

はい。

「じゃあ、死ぬわけですか？」

たいへんお気の毒ですが。

医師はモリーとシャーロットを前に、二時間近くも座つて、辛抱強く質問に答えていた。別れ際にALSに関する情報を書いた小さなパンフレットを渡された。まるで新しく銀行口座を開くときのような感じだった。外では日が燦々さんさんと照り、人びとが忙しげに行き来していた。パーキングメーターにコインを入れている女性。食料品を抱えている人。シャーロットの胸のうちには、数知れぬ思いが渦巻いていた。残された時間は？ その間どうやって暮らそう？ おかね払えるかしら？

一方、老先生は、いつに変わらぬ周囲のいとなみにただただ呆然としていた。世界よ止まれ！私の身に起こったことがわからないのか？

しかし、世界は止まらない。鼻もひっかけない。力なく車のドアを開けたモリーは、深い穴の底に落ちていく思いがした。

さて、どうするか？

答えをさがすうちにも、病気は日に日に体を侵していく。朝、車をガレージから出そうと思つたら、ブレーキが踏めなかつた。それで車の運転は終わり。

しょっちゅうよろけるので、杖を買つた。それで気ままな散歩は終わり。

YMCAへ水泳に通っていたのだが、もう着替えることができなくなつた。やむなくはじめて介護者——トニーという神学部の学生——を雇い、プールの出入り、水着の脱ぎ着に手を借りた。

ロッカールームで、ほかの人たちは見ていないようなふりはするが、やはり見てしまう。それでプライベートも終わりとなった。

一九九四年秋、モリーは自分にとつては最後のクラスを教えるために、山の上のブランダイスのキャンパスにやってきた。もちろん、中止しようと思えばできないわけではなかった。大学側も理解してくれる。大勢の学生を前に苦しむことありませんよ。家で用事を片づければ……。しかし、休もうという考えなど、モリーの頭に浮かびもしなかった。

よたよたと入ってきた教室は、三十年以上も過ぎた根城。杖にすがっているのが椅子にたどりつづくのに時間がかかる。やつとこのことで腰をおろすと、眼鏡がはずれて落ちこちる。しーんと見つめている若者たちの顔を見渡して、やおら語り始める。

「みなさんは、社会、心理学の授業に出るためにここに来ているのだと思います。私は二十年間この講義を担当していますが、今度という今度は、みなさん、この授業を取るのには危ないと言っておいてもよさそうです。実はいのちにかかわる病気にかかっていて、学期が終わるまでもたないかもしれません。」

そりゃ問題だと思うなら、履修を放棄してもいいですよ」

微笑。

これで秘密も終わりとなった。

ALSは火をつけたろうそくに似ている。神経を溶かし、体は蠟ろうのかたまりと化す。しばしば脚から始まり、だんだん上がってくる。腿ももの筋肉がコントロールできなくなれば、立ってられない。胴体の筋肉のコントロールを失うと、まっすぐ座っていられなくなる。とどのつまり、まだいのちがあれば、のどに穴を開けチューブを通して呼吸することになる。精神は完全に目ざめたまま、ぐにやぐにやの外皮の中に閉じこめられている。SF映画にそういうのが出てくる。まばたきや舌打ちはできるかもしれないが、人間らしさはその肉体の中に凍結されている。病気がかかってからこうなるまでに五年とかからない。

医者は余命二年と見ていた。

モリーはそれ以下と考えていた。

しかし、心の中には深く思い定めたものがあつた。それを彼は、頭上に剣がぶら下がっているような状態で診察室から出てきたその日に練り始めた。希望をなくして消えていくか、それとも残された時間に最善を尽くすか——と自分に問いかけていた。

めげるものか。死ぬことは恥ずかしくなんかないんだ。

死を人生最後のプロジェクト、生活の中心に据えよう。誰だっていずれ死ぬんだから、自分はかなりお役に立てるんじゃないか？ 研究対象になれる。人間教科書に。ゆっくりと辛抱強く死んでいく私を研究してほしい。私にどんなことが起こるかよく見てくれ。私に学べ。

モリーは、生と死の架け橋を渡るその道すがらの話をしようと考えた。

秋学期は足早に過ぎていった。薬の量がふえ、治療が日課になった。看護婦が次第に萎えてくる脚の面倒を見に訪ねてくる。ポンプで水を汲み出すような要領で、脚を曲げたり伸ばしたり、筋肉を働かせるのだ。週に一回、専門のマッサージ師がやってきて、固く凝ったところをほぐしていく。瞑想の先生にも会った。目を閉じ、思いを狭めて、世界をたった一つの呼吸にまで縮める。吸って吐いて、吸って吐いて……。

ある日、杖を使って歩いているとき、縁石につまずいて車道に倒れこんだ。それっきり、杖は歩行器にかえられる。体が衰えるにつれ、トイレへの行き来もつらくなったので、大きなビーカーに排尿することにした。その間、自分の体を支えていなければならぬ。つまり、ほかの誰かがビーカーを持っていなければならぬということだ。

たいていの人間は、こういったことが恥ずかしくてやりきれないだろう。特にモリーほどの年になってみれば。しかし、モリーはたいていの人間とはちがっていた。親しい同僚が訪ねてくると、よくこんなふうに言う。「あのねえ、小便がしたいんだ。手伝ってくれるかい？　そういうこと平気かな？」

相手は、自分でもびっくりするぐらい、平気なのだった。

意外なことに、訪ねてくる人の数はますます多くなってきた。死をめぐるディスカッションがループができあがった。死を迎えるとはどういうことか、世間の人たちはそれを理解しないでむ

やみに恐れている、といったことを話し合う。友だちには「ほんとうに助けてやりたいと思うなら、ただあわれみをかけるのではなく、実際に訪ねてくるとか、電話をかけるとか、自分の抱えている問題もこちらに話してくれ。いつもやってきたように」と語っていた。モリーは以前からいつもすばらしい聞き役だった。

体のほうはさまざまな障害が起こっているのに、声は相変わらず力にあふれ、人を引きつけ、精神は無数の考えでこやみなく働きつづけていた。「死が近い」と「役立たず」が同義語でないことを証明しようと、モリーは懸命だった。

年が明けた。誰にもそうとは言わなかったが、これが生涯最後の年になることをモリーは悟っていた。今はもう車椅子を使う身。愛する人すべてに、言いたいことすべてを告げようと、時間と格闘する毎日だった。大学の同僚が心臓発作で急死したときには、その葬式に出かけ、がっかりしてもどつてきた。

「もったいない！ こんなに大勢の人がこんなにいるすばらしいことを言ったのに、アーヴインの耳には全然届かないなんて」

いい考えが浮かんだ。電話をかけ、日取りを決める。ある寒い日曜日の午後、友人と家族の小グループが家に集まってきた。「生前葬儀」である。一人ひとりが老教授に弔辞ちようじを捧げる。泣く人あり、笑う人あり、ある女性は詩を詠んだ。

愛する愛する従兄おにいさま

年を知らないあなたの心は

時とともに年輪を重ね

やさしいセコイアのように

モリーもいっしょに泣き、かつ笑った。そして、ふつうなら誰も愛する人たちに向かって言えない心からの感謝の言葉を、その日のモリーは口にすることができた。「生前葬儀」は大成功だった。

ただし、モリーはまだ死んではいない。

それどころか、生涯でもっとも尋常ではない時期が、まさに幕を開けようとしていた。